

総合文化研究所主催合評会

久野量一『島の「重さ」をめぐって——キューバの文学を読む』

報告 高木佳奈

ラテンアメリカ文学が日本でも広く読まれるようになって久しい。「ブーム」を牽引してきた作家たちのみならず、若い世代の日本語訳も書店で目にする機会が多くなった。しかし日本語で書かれた研究書や概説書というと、その量は翻訳と比べて圧倒的に少ないと言わざるを得ない。ましてや広大で多様なラテンアメリカの中でも特定の地域の文学を扱ったものとなると、一般に入手できる書籍はほとんど見当たらない。このような現状がある中、「キューバの文学」を論じた画期的な一冊が二〇一八年五月三十日に松籟社から発売された。久野量一氏の『島の「重さ」をめぐって——キューバの文学を読む』である。本書は著者の長年の研究成果をまとめた研究書でありながら、キューバという国やその周辺で生まれた文学に関心がある一般読者も満足できる一冊となっている。ナショナルな枠組みにとらわれず「キューバの文学」を扱ったものであることは、タイトルのみならず本書の随所で示されている。具体的には、キューバ革命によって亡命、もしくは国外での出版を余儀なくされた作家たちや、キューバ政府によって顕彰されたキューバ以外（例えばメキシコ）の作家たちも含めて論じられている点である。

本合評会では、著者の久野量一氏と野谷文昭氏、柳原孝敦氏、

真下祐一氏、山辺弦氏、新谷和輝氏の五名のコメントーターを迎え、参加者十六名も交えて活発な議論が行われた。当日は台風十二号により大雨の予報が出ていたにもかかわらず、様々な分野から多くの参加者にお集まりいただいた。前半はコメントーターから各十〜十五分のコメントと、それに対する著者のリプライ、後半は参加者も交えた質疑応答という形で進められた。

本書は、自らのアイデンティティを自明視する「肯定の詩学」と、それを疑う「否定の詩学」の二つの立場からキューバの文学を論じている。前者を代表するホセ・レサマ・リマに詳しい真下氏は、一見対立するレサマと後者の作家ビルヒリオ・ピニエーラとの間に、共有された課題があったのではないかと指摘した。第一章で分析されているピニエーラの短編が、レサマ読解に欠くことのできないオルペウス神話のエピソードに対応していることを示し、両者をキューバ性探求の軌道が描く楕円のふたつの中心としてとらえることができると述べた。

本書で大きく取り上げられているレイナルド・アレナスとピニエーラを研究、翻訳している山辺氏は、本書のキーワードとして「複数性」、「断片性」を挙げた。その上で、複雑で多面的なキューバ文学を、最新の動向も含めた見取り図としてまとめ

た本書を高く評価した。また本書で用いられた「肯定／否定の詩学」や「第三世界文学」といった概念が、他の地域の文学にも応用可能で有用であると述べた。

本書に登場する作家たちにインタビューを行ったこともある野谷氏は、個々の例を挙げてキューバ国内外の知識人たちの複雑な立ち位置や態度の変化に言及し、キューバを論じる難しさについて語った。また日本人研究者の中でも、限られた情報の中でキューバ革命の正当性を信じ、「キューバ＝善／米国＝悪」という二分法でしか論じることができなかった世代と、革命の負の側面が伝わるようになった後の世代との間には大きな隔たりがあったことを指摘した。

アレホ・カルペンティエル等の研究で知られる柳原氏からは、キューバ人作家の文学上の「亡命先」としてブエノスアイレスが存在していたことを論じた第二章、第六章を評価するコメントが寄せられた。その一方で、ピニエーラが滞在した時代と、第六章で論じられているアントニオ・ホセ・ポンテの時代の差異を指摘し、同地に滞在経験のある久野氏に対して、ブエノスアイレスの位置づけに関する次回作の期待を寄せた。

キューバ映画の研究者である新谷氏からは、キューバ映画史と文学史の比較や、本書で論じられている映画『低開発の記憶』を監督したトマス・グティエレス・アレアについてのコメントが寄せられた。同作に見られる複数性やポストコロニアリズムの視点は、革命以前からのキューバの状況を描いていることを指摘した。

参加者から様々な質問・コメントが寄せられたが、特に本書で論じられている作品の翻訳を望む声が多かった。久野氏か

らも、今後積極的に翻訳に取り組んでいきたいとの回答があった。合評会を通じて、更なる研究テーマの発展や翻訳の企画など建設的な意見が多く寄せられたことは、著者の久野氏のみならず、参加者全員にとって非常に有意義だった。また本合評会には若手研究者も多く参加しており、大いに刺激を受けたことだろう。

合評会「久野量一『島の「重さ」をめぐって——キューバの文学を読む』」

日時：二〇一八年七月二十八日（土） 十五時—十七時

場所：東京外国語大学本郷サテライト 四階セミナー室

対象書籍…

『島の「重さ」をめぐって——キューバの文学を読む』

著者：久野量一（本学准教授）

コメンテーター…

野谷文昭（名古屋外国語大学教授）

柳原孝敦（東京大学教授）

真下祐一（駒澤大学教授）

山辺 弦（東京経済大学専任講師）

新谷和輝（本学博士前期課程）

司会・世話人…

高木佳奈（東京大学特別研究員）